

平成29年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 ひびきが丘 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	11.0	74	5.1	57	11.6	77	4.9	44
全国	11.2	75	5.2	58	11.8	79	5.1	46

(2) 本校の学力調査結果の分析

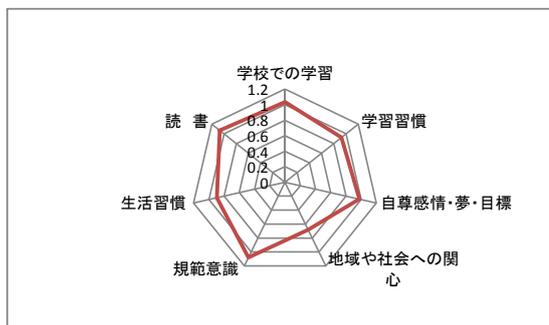
国語A	全体的な傾向や特徴など	・全体的には全国平均正答率をやや下回っていたが、言語知識理解は基礎ができていた。 ・話す、聞く力や書く力を問う問題に課題があり、考えの共通点や相違点を整理して聞くことや書くことを習慣化する必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	ことわざの使い方として適切なものを選択する問題については正答率が高い。	
	努力が必要な問題	グループの話し合いを通して見つけたよさとして適切なものを選択する問題の正答率が低かった。	

国語B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っていたが、登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉える力が伸びていた。 ・文章の内容について、根拠を明確にして、自分の考えを書く問題に課題がある	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	物語を読み、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる問題は、無解答率が低かった。	
	努力が必要な問題	目的や意図に応じて、必要な内容を適切に引用して書く問題は正答率が低かった。	

算数A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っており、二次元表の問題が特に無解答率が高く、誤答も多かった。必要な情報を活用することが課題である。 ・小数と整数の加法の計算力向上のため、位の理解が必要であった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	加法と乗法の混合した整数と小数の計算問題は正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	未知の数量を表す口を用いて、問題場面を式に表す問題は、無解答率が高かった。	

算数B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均に近づくことができた。応用問題に対しても、苦手意識をもたず、粘り強く取り組むことができたようになった。 ・とくに平均や割合についての数学的な考え方が高くなり、応用できるようになった。	全国平均正答率との比較 同程度である
	よくできた問題	跳び離れた場合の数値を除いた平均を求める式を判断することができる児童の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	与えられた条件に着目して、示された方法を問題場面に適用する問題は、正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・全学級でのめあてと振り返りを意識した学習展開の工夫により、「授業中に目標(めあて)が示されている」や「授業の最後に振り返る活動をよく行っている」と感じている児童が増えている。 ・「地域の行事に参加している」や「地域・社会の出来事に関心がある」児童の割合が減っている。PTAや地域と連携しながら、児童・保護者に啓発するとともに、地域とのつながりの大切さを価値付ける必要がある。 ・将来の夢や希望をもっている児童は全国と同じくらいいる。それぞれの夢を実現させるために具体的な目標設定を行い、行動に結び付けさせる必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<p>全校では、学習の流れを明確にしなが、どの教科においても自分の考えを書く時間を設定する。 学年では、既習学習の見直しや補充ができるように、朝自習・家庭学習を中心に基礎基本定着シートを活用する。 学級では、日々の学習や単元末テスト、基礎基本定着シートなどを活用して、学級の課題を明確にとらえて指導し定着を図る。</p>
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<p>日々の学級指導だけでなく、学級活動や学校行事の中で、とくに「日常の生活や学習への適応」や「健康安全行事」と関連付けながら、継続的に児童へ指導していく。学校(学級)通信や保健だより等を通して、学習習慣・生活習慣の見直しと改善を保護者へ啓発していく。</p>
--